

# 日本ラテンアメリカ学会 会 報

№ 27

1988年4月10日

## 第27号 目 次

1. 理事会報告
2. 学術文化情報
3. 定例研究会
4. 新刊紹介
5. 近着会員業績
6. 事務局から

### 1. 理事会報告

第35回理事会 1987年12月12日(土)

場所: 上智大学

- 議題: 1. 年報編集について  
2. 次年度大会の準備について  
3. LASAに代表派遣の件  
4. その他

### 2. 学術文化情報

#### アメリカ発見500年記念行事の動向

アメリカ発見500年にあたる1992年に向けて、関係各国では様々な記念行事の準備が進められている。各国の動向を元スペイン大使の林屋永吉氏にうかがった。

1982年にスペインおよび中南米各国でアメリカ発見500年記念委員会(La Comisión Nacional para Conmemorar el V Centenario del Descubrimiento de América y Encuentro de Dos Mundos)が組織されて以来、毎年8月6日に関係各国が参加して委員会が開催されてきた。これら各国の委員会はメキシコのように大統領を総裁にするなどオフィシャルな組織を設立して参画している。また、ポルトガル、ブラジルも政府が委員会を組織してこの関係各国間の連絡委員会に参画している。一方、アメリカ、イスラエル、ドイツ、イタリア、フランスはセミ・オフィシャルな組織を設立してオブザーバーとして委員会に出席している。日本にもオブザーバーとして参加するようスペイン政府より

要請がきており、1987年に中曽根前首相が訪西した折、スペイン政府よりあらためて委員会設立の要請があった。これをうけ、日本では、林屋永吉、増田義郎氏らを中心に、7月までに委員会を設立させる予定で準備を進めている。

スペイン政府は、記念事業としてオリンピックと万国博覧会の開催を1992年に予定している。バルセロナで開催が予定されているオリンピックはイベリア半島で初めてのものであり、セビリヤの万国博覧会は1970年の大阪万国博覧会以来の大規模なものが予定されている。また、500年記念委員会参加各国はそれぞれの国で出版物の刊行、シンポジウムの開催などの記念事業を予定している。アメリカはサンタ・マリア号の展示を予定しており、スペインはコロンブスを主人公にしたオペラを創作、上演する計画を立てているが、委員会参加各国共同の記念事業はいままでのところ企画されてはいない。日本でも委員会の設立によって、いくつかの企画案が具体化していくことになる。

(文責 三田千代子)

#### ラテンアメリカ累積債務研究会

ラテンアメリカ協会では、その研究活動の一環として、ラテンアメリカ累積債務問題について研究会を行っている。外務省、海外経済協力基金、日本輸出入銀行、ラテンアメリカおよび金融関係の学者、企業や研究所における実務担当者の参加を得て行われてきたこの研究会は、昭和60年に始まり、現在第3年目を迎えている。

外務省支援の下に開始されたこの研究会に、昭和60年度は15名の参加を得、同年8月から61年2月までに計7回の研究会を開催、関連の各項目につき発表と討議を行った。その成果は報告書「ラテンアメリカの累積債務とその政治社会的影響(中長期的展望)」として、61年3月にまとめられ、その後同協

会の出版物としても刊行された。

内容は、その累積債務に焦点を合わせ、背景、構造的要因を明らかにするとともに、中長期的展望に立った政治的・社会的インパクトを分析、わが国のとるべき対応策に言及している。

次年度もこの方式を踏襲、昭和61年度はメンバー19名により、同年7月から61年1月までに計7回の会合を開き、3月に報告書「累積債務を抱えるラテンアメリカと日本」がとりまとめられた。第3年目にあたる62年度は、「ラ米累積債務問題の現状とわが国の協力」(仮題)をテーマとし、メンバー17名が参加し研究会を続けている。

取り扱うべき対象は広汎かつ難しい問題であるため、経済金融のみならず各国の歴史、政治、社会面からもアプローチし、次第に問題の核心に迫ることとしているので、63年度以降も、時宜に適したテーマのもとに実施してゆく予定である。(前田正裕)

#### 昭和62年度文部省科学研究費補助金による海外学術調査【現地調査】

- 「ブラジル、Poços de Caldas における稀土類鉱物・放射性鉱物の調査研究」(ブラジル) 床次正安(東大・理) 6名
- 「中米インディオの歯科人類学的研究」(メキシコ・グアテマラ)

三浦不二夫(東京医科歯科大・歯) 13名

- 「ブラジル、リオ・ドッセル湖沼群の陸水生生態学的特性と湖沼類型に関する研究」(ブラジル) 西篠八東(名大・水圏研) 9名
- 「南米における隠花植物の分化と分布に関する研究」(チリ)

井上浩(国立科学博物館) 7名

- 「ブラジルの民衆文化に関する研究」(ブラジル)

中牧弘允(国立民族学博物館) 5名

- 「中央アンデス農牧民社会の民族学研究」(ペルー)

友枝啓泰(国立民族学博物館) 7名

- 「デャドヴオ・テルの調査」(ブラジル) 尚樹啓太郎(東海大・文) 8名
- 「南部メキシコ村落における宗教と法慣習と現実」(メキシコ)

野村暢清(久留米大) 9名

- 「1987年エクアドル地震に伴う土石流災

害に関する調査研究」(エクアドル)

伯野元彦(東大・地震研) 3名

- 「環境資源利用をめぐる比較人類生態学」(ボリビア) 柏崎浩(東大・医) 4名

#### トヨタ財団1987年度研究助成

- 「ラテンアメリカ主要国における対日イメージ調査に関する予備的研究」(ブラジル、メキシコ、コロンビア他)

G・アンドラーデ(上智大) 10名

- 「ペルー日系社会の実態調査—20年後の変貌—」(ペルー)

増田昭三(東大・教養) 6名

### 3. 定例研究会

#### 西日本部会研究会

西日本部会は、ホセ・カルロス・マリアテギ著『ペルーの現実解釈のための七試論』日本語版(柘植書房近刊)の発行を機に、3月1日(火)、大阪市立大学文化交流センター会議室にて、研究会を開催した。小林致広氏の司会の下、まずマリアテギの孫、ホセ・カルロス・マリアテギ三世がハビエル・マリアテギ氏のメッセージを代読し、続いて、青木芳夫、山藤孝夫両氏の報告が行なわれた。

#### マリアテギ著『七試論』の七番目の外国語版によせて

ハビエル・マリアテギ

本年3月、ホセ・カルロス・マリアテギの基本的著作、『ペルーの現実解釈のための七試論』の日本語訳の正式の出版によって、東洋の広範な読者が本書に接することが可能となりました。というのも、これによって中国語版が、両国人民が古くから文字を共有しているという便宜によって、とおからず発行されるであろうからです。

この日本語版出版は、本書の初版(リマ、1928年9月)の60周年と時を同じくしています。そのうち本書は、スペイン語のみならず、他の外国語によって、さまざまの国において出版されつづけてきました。そのうえ、ペルー国内においても、その出版史上未曾有のことなのですが、『七試論』の大衆版が毎年5万部以上発行されていることを思いおこすべきでしょう。他のラテンアメリカ諸国においても、つぎのように各国版が発行されて

います — チリ (ユニベルシタリア、1955年)、メキシコ (2版あり、ソリダリダ、1969年、およびエラ、1979年)、キューバ (3版あり、カサ・ザ・ラス・アメリカスの初版は1969年)、ウルグアイ (マルチャ、1970年)、ベネズエラ (ビブリオテカ・アヤクチョ、1979年) およびスペイン (グリハルボ、1976年)。

最初の外国語版は、ロシア語 (モスクワ、1963年) で、つづいてフランス語 (2版あり、マスペロ、1968 および1977年)、英語 (テキサス大学、1971年、再版のペーパーバック版につづいて、本年三版の発行準備中)、イタリア語 (エイナウディ、1973年)、ポルトガル語 (サンパウロ:アルファ・オメガ、1973年)、ハンガリー語 (1977年)、ドイツ語 (アルグメント、1986年)、そして今回の日本語 (東京: 拓植書房、1988年) がこれにつづきます。

他のマリアテギの著作では『イタリアからの手紙』および『小説と人生』が訳されており、そして著作のアンソロジーが出版されています (イタリア語で3冊、そしてポルトガル語、ロシア語、ブルガリア語、ドイツ語、および南仏のオック語のものがあります)。いくつかのラテンアメリカ諸国においてもアンソロジーが重要な出版社から発行されています (そのうちの2冊はメキシコの公教育省によるものです)。

この日本語版は、日本のマリアテギ研究者グループの長年にわたる努力の成果です。何年もまえから分冊が出され、雑誌『インパクト』に論文が発表されました。原田金一郎・大阪経法大助教授は、この協働作業を指導し、翻訳を編集しました。本書は、エンプレサ・エディトラ・アマウタ社の承認のもとに、東京の拓植書房によって出版されるものです。

本書は、ハビエル・マリアテギ博士による序文、原著書全文、訳注および索引、現在世界における本書の有効性とマリアテギの思想の意義についての原田助教授によるあとがき、および文献目録を含んでいます。

(このメッセージは、3月1日の西日本本部会のためによせられ、ハビエル氏の長男、ホセ・カルロス・マリアテギ・エセタによって読みあげられました — 原田金一郎 訳)

## 第9回定期大会のお知らせ

第9回定期大会は、1988年6月4、5日、筑波大学にて開催される予定である。

大会準備委員会 (委員長: 細野昭雄、  
委員: 清水透、山田睦男、中川文雄、  
松本栄次、高橋伸夫)

### 報告1.

ペルーの二重言語教育とマリアテギ  
— プーノ・プロジェクトを中心に —

青木 芳夫 (奈良大学)

マリアテギは、『ペルーの現実解釈のための七試論』(1928年)の第IV試論において、教育問題を分析している。そのなかで彼は、ペルーの公教育が植民地期スペインの遺産のうえにフランスや米国の影響をうけて形成されてきたために問題をのこしていること、近年ラテンアメリカ各地で大学改革運動がおこってきたこと、そして現在では封建的精神と歪められた資本主義的精神とが対立する一方、人民大学づくりなどの社会主義的潮流もまたうまれてきていることを指摘した。

本報告では、このような史的分析やマリアテギの問題意識 (インディヘニスモと社会主義の合流、「インディオ問題は土地問題である。」) を前提にして、スペイン語・ケチュア語・アイマラ語の三重言語・三重文化圏であるプーノ県農村部においていまや実験段階を脱しようとしているプーノ・プロジェクト (1980年実験開始) の二重言語・二重文化教育について検討した。

第1に、プロテスタント系の夏期言語研究所が推進しているセルバ・プロジェクト (1953年実験開始) の二重言語教育との比較によって、プーノ・プロジェクトの方法論を明らかにした。つまり、セルバ・プロジェクトの開発主義にたいして、プーノ・プロジェクトはインディヘニスモに立っている。

第2に、プーノ・プロジェクトは当初から西ドイツによる国際技術協力にその多くを負っていた。したがって、二重言語教員・専門家の養成や教科書づくりなどをいかに土着化 (「ペルー化」) していくかがつねに問題であった。しかし、プーノ県はこの課題を克

服しつつあるように見える。それだけの社会的基盤は拡大したといえる。たとえば、フレイレ（ブラジル）による識字化教育、ペラスコ政権期の失敗の経験、インディヘニスモの伝統と革新、シエラ南部における「解放の神学」運動、などである。

（追記）『Allpanchis』（アンデス司牧研究所）の最新号は、「言語・国家・アンデス世界」を特集しているが、本報告では十分に活用することができなかった。

## 報告 2.

マリアテギの「文学過程」をめぐって

山蔭 孝夫（京都産業大学）

『ペルーの現実解釈のための7試論』

（1928）の第Ⅶ試論『文学の過程』で、著者ホセ・カルロス・マリアテギの意図したところは、ペルー文学史の概観を提示することではなく、その本質的特徴を明らかにすることであった。分析にあたっては、古典主義、ロマン主義、モデルニスモといった伝統的文学研究の図式は採用されていない。同時に、プロレタリア文学、ブルジョア文学、貴族文学、封建主義的文学といったマルクス主義的な分類にも拘束されることはない。新たな図式として彼が持ち出したのが、(1)植民地的文学、(2)世界主義文学、(3)国民文学という分類である。

植民地的文学とはスペイン文学を規範とする文学を指す。歴史上の植民地期と一致するのではなく、独立後も根強く残った。この反動的な文学の本質は、特にその指導的批評家リバ＝アグエロの『独立国ペルーの文学の特徴』へのマリアテギの痛烈な批判を通して示される。リバ＝アグエロは、原則的にスペインの伝統を擁護し、原住民の文化や民衆的文学をペルー文学の基礎とみなすことには異論を唱えた。その見解は、アカデミズムの名に隠れた保守主義といえよう。

世界主義文学とは、スペイン以外のヨーロッパ文学を規範にしたものを指す。マリアテギによると、この段階への橋渡し役を演じたのがゴンサレス＝プラダだということになる。西洋精神の紹介に努めたゴンサレス＝プラダは、インディオ擁護の論陣を張ることで、国民文学への方向性をも示したと考えられる。

国民文学についての道すじは必ずしも明確

に語られてはいないが、少なくとも世界主義を踏まえた上での土着性の再評価が考慮されている。インディヘニスモ文学がその核になることは当然である。さらにインディヘニスモを巡る論述においては、ペルーの歴史的、精神的二重性の指摘や、土地問題の重視など、のちのインディヘニスモ文学のあり方に決定的な影響を及ぼした内容が含まれていることを忘れてはならない。

最後に第Ⅷ試論では、思想家マリアテギというより、文学者マリアテギの鋭い洞察力が感じ取れる部分が少なからずある。たとえば、セサル・バリェホを原住民の感情を表現した国民詩人であると規定している点である。しかも、それはケチュア語を用いることによってではなく、象徴主義という形式によって達成されている点で大きな意味をもっている。また、ホセ・マリア・エグレンの純粹詩を、「中世の西洋が熱帯アメリカに迷い込んだ純粹のこだまである」と評したあたりは、硬直したマルクス主義批評家のそれではない、柔軟な批評精神がうかがえるのである。

## 4. 新刊紹介

松下 洋著『ペロニズム・権威主義と従属—ラテンアメリカの政治外交研究—』有信堂 昭和62年

本書は、著者が主として1980年代前半に発表した諸論文（未公刊を含む）を集めたものである。内容は、Ⅰ、地域研究の新しい地平をめざして、Ⅱ、ラテンアメリカの国際関係と軍事化、Ⅲ、ペロニズム分析からポピュリズム論へ、の3部構成である。

多くの読者は、まず「はしがき」の中に述べられている、松下氏の率直な学問的行路の吐露に、魅了されずにはおられないであろう。「二年近くもかけてつくった仮説が崩れるのを目の辺りにして途方にくれ」「仮説の崩壊という苦しみを味わいつつ論文を作成していった過程で、私は先覚の理論や分析枠組を利用しながら実証を深めるという方法では限界があり、地域の研究はやはり地域の現実に根ざし、そこから出発しなければならないことを痛感した」という記述に凝縮されている。

このような問題意識で、ジェルマーニとオドーネルが、アルゼンチンの政治社会学とし

て紹介される。そして、両者の理論（ペロニズム、官僚主義的権威主義）が、「アルゼンチンという地域性を超え、ラテンアメリカを、ひいては西欧をも射程内に含む理論の枠組を生んだ」と指摘される。1970年代の米国を中心とした「行動科学」の手法が、多くの厳しい批判に曝され、現在社会科学の諸領域にわたって、混沌とした状態にあることは、今さら指摘するまでもないであろう。政治学においては「大理論」が、多様化する国際（内）政治の中ではもはや理論的妥当性を失ってきたし、経済学においても、マルクス経済学、近代経済学（ケインジアン、マネタリスト）のいずれもが、深刻な理論面と現実面での深い乖離を抱え込んでいる。こうした状況の下で、地域研究や、政治学と経済学の融合（政治経済学、国際関係論等）が叫ばれてきたのであった。

以上の文脈を踏まえた時、本書第I部第2章「第三世界研究の意義」は、地域研究を志す学徒にとって必読のものといつてよい。

「日本の第三世界研究は、欧米や現地の学者の研究の紹介の枠を脱して、現地調査を踏まえたものが増加しつつあるが、記述を主体とした実証的な研究、もしくは一般理論を適用した研究にとどまっているものが多く、従来の学問に大きな影響を与えることは期待し難い。実証的研究は重要性をもつが、それが理論的関心を欠く場合には、外国事情学に墮しかねないし、一般理論から地域の分析をはかる方法は、地域を一般理論の検証の場にとどめ、地域研究を既存のディシプリンの下位に位置づける（一部縮写した一引用者）」。

日本における（そして多分欧米においても）地域研究が、学会の潮流の中で、未だ本来持つべき市民権を得ていないと思われる事情は、松下氏の上述の言葉に的確に表わされているような気がする。筆者は地域研究についての松下氏の問題意識に大筋において賛同するものであるが、次の二点を指摘しておきたい。ひとつは、現実の問題として、地域研究の本来の姿である「具体的事実からの帰納的理論化」の営為がいかに困難な作業かである。そのためには、多くの事実を検証しながら、（一般理論の協力も得ながら）推論を行なう必要がある。もうひとつは以上のことと関連して、具体的事実すら十分に検証・研究されていないのが、少なくともラテンアメリカ研究の実情ではないか、ということである。確かにアルゼンチンという域内先進国（特に文化面における）では、これまであ

る程度の蓄積があった。けれども、アメリカ大陸の国々に、未だ白地図が何と多いことであろうか。従って、敢えて誤解を恐れずに述べるとすれば、外国事情学（理論的関心を持った）もここ当分は必要ではなからうか。少なくともそれらは、事例研究としては役に立つはずである。楽観的に見れば、いずれこのような事例の蓄積が、帰納的な理論化への作業へと昇化されていくのではないか。最後に一言。松下氏は、第5章「カストロ主義と中ソ対立」の中で、「ニカラグア革命はある重要な点においてキューバ革命的ではあったが、カストロ主義的ではなかったように思われる」という極めて興味深い問題提起をされている。このことは、サンディニスタ革命の持つイデオロギーと、その性格に密接に関わる問題である。それは、ニカラグアという米国の覇権体制の中に、歴史的に嫌応なく組み込まれた小国における自然発生的（ナショナルという意味で）でユニークな民族解放運動として捉えられねばならない。今後もっと研究されてよいテーマと思う。（田中 高）

## 5. 近着会員業績（含：寄贈）

〔誌〕『イベロアメリカ研究』1987年後期通巻17号（上智大学イベロアメリカ研究所 1987. 12. 20）

〔誌〕岸川毅『中米政治体制の構造と変動』—ラテンアメリカ研究（I, L, A）4611—（上智大学イベロアメリカ研究所 1987. 10）

〔誌〕『ラテンアメリカの社会階級』—ラテンアメリカ文庫シリーズ（B, I, L, A）461—（上智大学イベロアメリカ研究所 1987. 9）

〔誌〕角川雅樹「ドミニカ共和国」『研究・評論・エッセー誌 人間の場から』第9号（東海大学留学生教育センター 1987. 11）

〔誌〕『東海大学保健管理センター年報 1986』第17号（東海大学保健管理センター 1987. 11. 30）

〔抜〕角川雅樹「メキシコ国立自治大学における精神衛生管理」『精神医学』49巻第11号（医学書院 1987. 11. 15）

〔抜〕角川雅樹「メキシコにおける精神病の一事例—カルチュア・ショックの視点から—」『こころの健康』第2巻第2号（日本精神衛生学会 1987. 11）

〔籍〕石井章編『ラテンアメリカの都市と農業』（アジア経済研究所 1988. 1. 29）

〔誌〕『東海大学文明研究所紀要』第7号（東海大学文明研究所 1987）

〔籍〕『EL ARTE DE LA CEREMONIA

DE TE URASENKE EN MEXICO』(日暮豊  
広氏より寄贈)(URASENKE DE MEXICO,  
A. C. Mayo de 1987)

〔誌〕『政府派遣・南米経済使節団報告書』  
(外務省中南米局 1987.12)

〔誌〕『日本・アルゼンティン協力 中長期  
展望会議報告書』(外務省中南米局 1987.9)

〔誌〕『中南米諸国便覧』(外務省中南米局  
1987.12)

〔抜〕青木芳夫「ペルーの二重言語教育の二  
類型」『奈良史学』第5号(1987.12)

〔誌〕「アンヘリカの現代ケチュア語入門  
(一)」『資料ラテンアメリカ』第10号(ラテン  
アメリカ資料センター 1988.1)

〔抜〕宮野啓二「スペイン領アメリカにおけ  
る原住民の集住政策—メキシコを中心に—」

(一)・(二)・(完)『広島大学経済論叢』  
第11巻第2・3号(1987.11)、第11巻第4号

(1988.2)

〔冊〕「メキシコ研究センター通信」№10

(京都外国語大学メキシコ研究センター  
1987.11.1)

〔抜〕大串和雄「ラテンアメリカ左翼知識人  
における新しい民主主義論の潮流」『平和研  
究』第12号(1987.11)

〔抜〕吾郷健二「メキシコ農村とアメリカへ  
の「移民」」『経済学論集』第22巻第3号  
(西南学院大学 1987.12)

〔抜〕ホセ・カルロス・マリアテギ著 原田  
金一郎訳「ペルーの現実解釈のための七試論  
(VI・VII)」『経済学論集』第11巻第2号(大  
阪経済法科大学 1987.6、1987.12)

## 6. 事務局から

新入会員(第35回理事会62年12月12日承認)

No.27 1988年4月10日発行  
〒157 東京都世田谷区成城  
6-1-20  
成城大学法学部中川研究室内  
日本ラテンアメリカ学会事務局  
☎03-482-1181